

■平成二十三年三月十九日

住職法話 春彼岸法要

## 春彼岸

善光寺住職 黒田博志

皆様御元気でござ詣なによりでございます。

「暑と寒さも彼岸まで」という諺があります。

御承知の通り彼岸は一年に春と秋二回巡って参ります。春分の日と秋分の日それぞれ前後三日間、あわせて一週間が彼岸という行事でございます。

この、二度の中日は太陽が真東から真西に沈みます。太陽の沈む方向に極楽浄土があるということから、日本ではこの日に浄土を想い亡き方をしのぶ日になったとも言われております。

太陽が沈むその先にある西方浄土に思いをはせた私たちの祖先は、太陽の恵みを受け、自然の流れの中で生活をし、その中には人間の力の及ばないものに対する畏敬の念が多く培われておりました。

またこの日は、昼と夜の長さが全く同じこの不可思議な現象と事象に感謝と報恩の念を尽し、神仏に敬意を払って参りました。

八百万（やおよろず）の神と言われるほどに多くの神仏を礼拝し、たとえ一本の木や小石ま



でも願いをかけ、祈りを込めることができる感情の豊かさ。四季折々めぐり来る風土で農耕し生活してきた社会に由来しているとも言われ、国としても、この日を祭日として定め、祖先に感謝し自然をたたえ、生物を慈しむ日だとしています。

民族学において、お彼岸は太陽を拝し、感謝と願をかけ、この期間目に見えないご先祖さまに思い致して報恩感謝の誠を尽くすという意味から墓参りであったり、寺詣りであったり、仏前にお参りするというのがお彼岸の慣わしとなっています。

このお彼岸会という「祀りごと」は日本独特の文化なのです。

仏教の始まりは約二千五百年前にインドで興り、中国を経て日本に伝来したと言われています。しかし、インド、中国ではお彼岸にお寺参

りやお墓参りの習慣はないのです。この習慣は日本独自の行事なのです。

その起源は聖徳太子さまの頃と言われているから約千四百年にも亘る年中行事となっているのです。仏教が日本に伝わりましたのは六世紀半ばと言われています。その頃初めて仏教を深く理解し、人々の信仰心を篤くなされたのが有名な聖徳太子さまです。

聖徳太子さまは生き方の指針「十七条憲法」を制定し、その第一条に論語の中から「和をもって貴し」と示し、国家の役人として政務にあたる上での心がまえを説くとともに、第二条では仏教より「篤く三宝を敬へ」として、仏法を信じ敬うべきことを強調しております。これが日本國の憲法の始まりです。

ご存知の方もいらつしやると思いますが、善光寺に太子像をお祀りしておりますが「どこに



あるかご存知の方？ ハイッ！

「そうです。仰せの通りこの釈迦殿の一階の正面右側に安置してあります」。

師父は、聖徳太子さまは日本で最初に仏教を深く理解し広めたお方、そのご恩に報いる為にお祀りし毎日感謝のまことを捧げ尽くしております。私もそれを受け継ぎ毎日読経供養させて頂いております。

さて、このお彼岸に実践しなければならぬ六つの徳目がございます。

それを「六波羅蜜」といいます。この徳目は、皆さまが、実践可能なものでなければなりません。古代インドのサンスクリットでは、「パーラミター」と発音し、日本では「波羅蜜多（はらみた）」と読みます。この意味は、到彼岸であり、彼岸に到るとなります。

## 六つの願い

あたえよう、物でも心でも（布施）  
生きよう、人間らしく（持戒）  
耐えよう、どんなことにも（忍辱）  
努めよう、自分の仕事に（精進）  
おちつこう、息ととのえて（禅定）  
目ざめよう、仏の道に（智慧）

ろっばらみつ  
六波羅蜜多

おや、これは『摩訶般若波羅蜜多心経』ではないか？とお気付きと思います。そうなんです、この心経は「彼岸に行こう」という教えなのです。この六度が実践項目であり、仏教徒の目標なのです。いかがでしょうか。

一つには、「布施」です。

布を施すと書きます。

皆さまもこの言葉はよく耳にされると思いますが、布施とは、施すことなのです。一般的には、在家の皆さんがお坊さんに財物を施すことだと考えますが、これは「財施」といい、布施の一部です。お坊さん相手ではなく、他人にやさしさやいたわり、笑顔やことば、手を供えるのも立派な布施なのです。大事なのは、相手に恵んでやるという気持ちは布施ではありません。布施とは、「させて頂く」心なのです。思いやりであり心遣いなのです。

今盛んに公共広告機構より「思いやり」「心遣い」いずれも目には見えないが、行動すれば見えると、盛んに放映されています。まさしくこれが布施なのです。

二つ目は「持戒」です。戒めを持つと書きます。

この徳目は、戒めを守るということです。人としてのルールを守ることが大事。しかし、戒を完全に守ることは過酷で不可能です。大事なことは、破った時の懺悔と反省の気持ちの在り方です。

日本の仏教では、僧侶に求められる菩薩戒という十六の戒めがございます。上座部仏教のタイでは二百二十七の戒めがございます。それはもう、非常に厳しく立つも坐るも、食べるも、眠るも、大変なことです。

三つには「忍辱」（にんにく）です。

この言葉は食べるニンニクではありませんよ。忍ぶ辱（はずかし）めると書きます。

寛容な心を持ち、いかなる境遇にも耐え忍ぶことです。

お釈迦様は、人生は苦であるとお示しになりました。「四苦八苦」という語源はここからだと言われています。殊に私たちが生活している世界を「娑婆」と言い、「忍土」とも言っている世界にはとても辛い所です。他人から受ける迷惑をジーンと我慢して、耐えて忍びつつ生きる。そして他人を責めず、赦（ゆる）しながら生きる。これが忍辱だと申されているのです。

とても難しい境遇であり、徳目なのです。心するだけで大変なのです。だから、置かれている立場立場で精一杯勤めて行くのです。

師父は私に、よく「人生は我慢だ」と言っておりました。子供のころよく師父に叱られ、そ



の都度泣いておりました。すると時折、師父は私に向い「人生とはなんだ？」と聞きます。わけのわからないまま、泣きながら「人生は我慢です」と答えると、「では泣くな」と言われました。

時として逆に「博志、我慢しなくてもいいんだぞ」とも言われました。要は心の持ち方を教えてくれたように今は思います。

人に我慢を強いるのは、難しくありません。しかし、強いる側に余程な思い遣りがないと届くものではありません。やりたいことをやるな、やりたくないことをやれと強いるのですから。当時の私には「あべこべ」「ちぐはぐ」「全くいじめ」としか思えませんでした。しかし、この師父の薫陶が、私の欲望を抑制する心を養ったように思います。心の持ち方で、地獄にもなり、極楽にもなる。娑婆で生きることが、とても大変なことでございます。

四つには「精進」です。

精らかに進むと書きます。この言葉は皆さまもよく耳にしますよね。

怠ることなく一生懸命努力することです。何のために努力するのか、大事なことは目的地、到達点や結果ではないのです。一步一步あゆんでいるその歩み。毎日毎日の生活、それこそが大事なのです。おろそかにしない努力。これが、精進だと思ふのです。

通説では、一心に仏道や仏事を修めることだといわれます。また肉食しないことも、精進、「お精進」と言います。

五つには「禪定」です。

禪を定めると書きます。

この語は、心を穏やかにして真理を見極めることです。

心を穏やかにするというのは、意外と難しい。

仏道で言う禪定とは、精神を統一することを言い、迷いを断ち感情を鎮め、真実の仏道を求めて、こだわりや、とらわれから解放されることを言うのですが、簡単に参らぬのが常です。あれこれと心が動きすぎなのです。

油断しますと、自分のことばかり考えてしまいます。周囲を慮る心に欠けてしまうのです。

私の日課は二つあります。坐禅と写経を毎日勤めることです。坐禅は時間が許す限り、朝晩勤めることにしています。

心掛けていることは、

一つには「調身」。身を整えることです。背筋を伸ばし右にも左にも片寄らずまっすぐに坐ること。

二つには「調息」。呼吸を整えることです。一つ一つの呼吸を丁寧にお腹を意識して深くゆっくりと行うことを心掛けています。

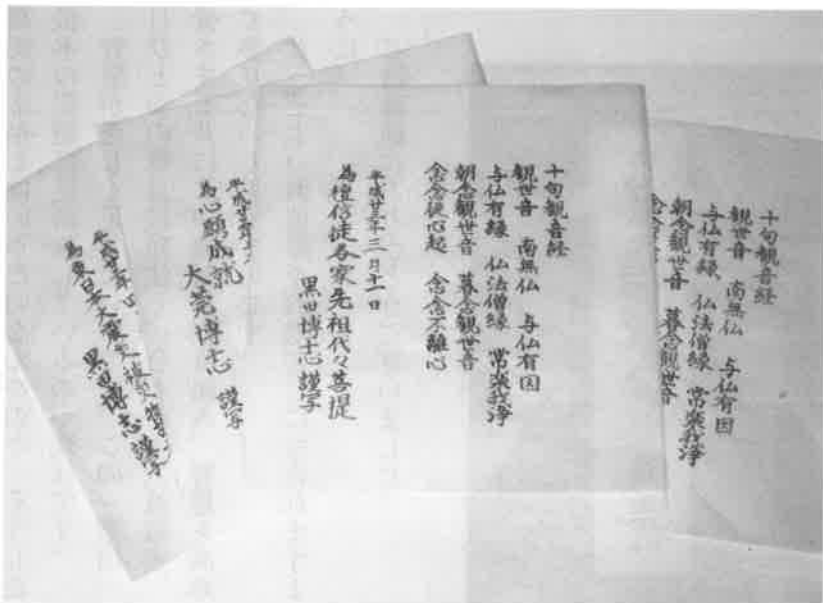
三つには「調心」。姿勢と呼吸を整えれば自然

と心も整って参ります。

これがまさに禅定なのです。坐を移し日常業務に追われますと、すぐ心が乱れて参ります。残念です。

そしてもうひとつは「写経」です。文字通り經典を写すことです。善光寺でも毎月「般若心經」の「写経会」を行っていきます。字数は二百七十六文字でございますので、一時間はかかってしまいます。日々、私の写経は「延命十句觀音經」を謹んでおります。これは、わずか四十六文字です。だいたい十五分前後で尽くすことができます。

私は僧侶です。もしも私が日々の坐禅を怠るようなことになれば、私は禅僧ではなくなりません。これは、禅僧として生きる私の基本であり、使命だと信念し、院代と共に少なくとも禅定という徳目の実践に精進しています。ここのところを、師父も厳しく申しておりました。





六つには「智慧」です。

この徳目は、物事を正しく判断し、処理する心の働き、すなわちものの道理を知る賢明さを培うことです。

これは前の五つを実践することにより自然と身につけていくものだと教えて頂きました。今こうしてお話させて頂くのも智慧の一部です。

智慧は「般若」ともいい、インドの言葉では「パニニヤー」。いわゆる「般若心経」のことだと教えています。いかにも善悪の業や因果の道理を説いてくれます。従って仏教は智慧の宗教だと言われる由来はここにあり、事実を事実として正しく観る目を養ってくれるのです。

仏教の魅力もここにあるのかもしれない。

私も日々悩み苦しんでおります。研鑽が足りないのだと思っています。人はなぜ生まれて来たのか、どのように生きていかなければならないのか、

真実の幸福とはいったいなんなのか。そうした根本の問題に足踏みしているのが現状です。

智慧が乏しく足りないのです。この一週間一日ひとつの徳目に傾注し、合わせて六波羅蜜、皆さまと共にこの徳目に取り組み、智慧を高めて参りたいと思っています。

どうぞよいお彼岸をお過ごしになられますように。

ご清聴誠にありがとうございました。

